

Title	不同意の表明 : 日本人大学生の場合
Author(s)	大塚, 淳子
Citation	日本語・日本文化. 2005, 31, p. 81-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9446
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究ノート>

不同意の表明 ——日本人大学生の場合——

大塚 淳子

1. はじめに

日本語学習者は将来ビジネスを行うにしる、大学で研究するにしる、さまざまな場面で交渉を行わなければならない。殊に相手の意見に同意ではない不同意を表明しなければならない場合は、相手の Face をつぶしかねないため、高度な会話ストラテジーが必要となると考えられる。そのため、日本語教育の現場でも反対意見の述べ方や、討論の仕方などが取り上げられている。しかし、日本人は実際に、どのように不同意を表明しているのだろうか。

実際に行われた会話を分析する CA の手法で、Pomerantz (1984) は、アメリカ人の会話を分析し、同意が期待される場面で同意を示す場合は、すぐに発話がなされるのに対し、不同意を表明する場合は、発話がおくれたり、何も答えなかったりするとしている。また、質問を繰り返して説明を求めたり、部分的な繰り返しを行ったり、不同意の前置きとして同意を示す場合もあるとしている。Mori (1997) は日本人の日常会話における *opinion negotiation* を分析し、知識を提示したり、感情的なことを挿入したり、他の参加者からの反対意見が提示される前に自己緩和を行うことを指摘しているが、これは日本人のコミュニティーに限ったことではないとしている。

一方、会話のスタイルが文化により異なるとの研究もある。日本人の会話スタイルは、アメリカ人と比較して「対立をしないように願う」(Yamada 1993)、「対立を避けるために、一人で複数の観点を提示する」(Watanabe 1993) と指摘されている。

このように、会話スタイルが文化により異なる部分と、文化差がなく共通する

部分があると考えられる。ではどのような部分が共通し、どのような部分が個別的呢かを明らかにする必要があるだろう。しかしその前にまず日本人が実際にどのように会話を行っているかを明らかにする必要があるが、実際の会話資料をもとに日本人がどのように交渉を行っているかを分析した研究はまだ少ないのが現状である。

本研究は、日本人大学生により実際に行われたグループ討論を分析することによって不同意の表明のしかたを明らかにしようとするものである。

2. 研究方法

分析資料について

大学2,3年生の男女2名ずつ、計4名を1グループとして、10グループに、意見を述べ合うタイプと、グループとして結論をだすタイプのグループ討論を20分程度で行ってもらい、これを録音、文字化したものを分析したり。

会話資料の文字化記号について

アルファベット：話者（A,B：女性話者、X,Y：男性話者）

数字：発話番号

[：発話の重なり

?：上昇イントネーション

3. 結果および考察

今回「不同意表明」としたのは、ターンをとった話者が他の参加者の発話に対し同意ではないことを表明する場合とし、発話内容から判断した。「不同意」を示す方法としては「黙って何も言わない」こともあるが、グループ討論であるため黙っている参加者がいても必ずしも不同意を表明しているとはいえないため、分析対象とはしていない。分析対象となったのは151例である。

この中で、不同意の表明を示すような何らかのマーカ―が、ターンの始まりにある場合、ターンの途中で表れた場合、特にマーカ―がない場合があったので、それぞれに分けてみていく。

○ターンの始めに生じるマーカー

ターンの始めに生じるため、これから話すことが、不同意であるとすぐにわかるマーカーとなっている。言語形式では、「でも」「だって」「というか」のような接続詞、「えええ?」「いや」などの間投詞、否定的な評価があった。また、「んー」などの言いよどみや躊躇もあった。

でも

逆接の接続詞はいろいろな種類があるが、本資料では、「でも」が151例中55例(33.7%)と、最も多用されていた。「けど、けれど」は、文中に出ることが多く、ターンの開始時には表れなかった。また、「しかし」も表れなかった。

[例1] (脳死を死とすることについて)

1X: 脳死は死でしょう

2B: うーん、でもね

3Y: 法律で決めるっていうこと

4W: でも決めたっていいじゃん

3Yは、脳死を死と法律で決めることに問題がある、としているのに対し、4Wは、法律で決めてもいいと不同意を表明しているが、ここで、「でも」を伴っている。また、1Xに対し、2Bが「でもね」と言ったのをひきとる形で3Yが1Xとは異なる意見を出していることから、「でもね」というのが、不同意を表明するマーカーとして認識されていると考えられる。

本資料では、2Bのように「うーん」という躊躇のあとに表れたり、「でも、なんか」のように表れていた。躊躇を示したり、「なんか」を共起させることによって、逆接の効果を和らげようとしていると考えられる。

というか、というより

[例2] (脳死を人の死とすることについて自分ならいいが家族ならどうかというトピックで)

1B: 肉親の立場として、[まだ体温もある人を、そういう風に死人とし

2A: [うん

3B： て扱われるのがやっぱり、ちょっと納得できないっていうとか、わりきれないっていうんで、多分問題になっているんで

4A： っていうか、今の状態で、っていうか、法律とか、この間国会でとおった場合ですか。何か、あれは、（後略：脳死の前に意思表示をしておけば臓器移植ができるということが将来問題となりそうだということ述べる）

3Bで脳死を死とすることが問題になるのは、「まだ体温がある人を死人として扱う」ことに原因がある、という意見に対し、Aは決めようとしている法律の内容があいまいな「今の状態」を問題の所存と考えており、Bと見解が異なる。しかし、Bの意見を否定するのではなく、「っていうか」を使って修正しようとしている。

このように、「というか」は、相手と自分の意見が異なる場合、異なる部分を提示したり、修正する際に使われている。本資料では8例（4.9%）あった。

だって

今回の資料では、1例で、「だって、医者しかわからないわけじゃん、はっきりいうと」というものだったが、「じゃん」「はっきりいうと」など、自己の意見を強く主張するものだった。

いや、や、いやー

「いや」「や」などのように、前の発話を否定する表現は、151例中19例（11.6%）だった。そのうち、4例は、他のマーカーと共起していた。

[例3]（脳死状態にしておいた方が、医療費がかかるかどうか）

1Y： でも、医者としてはひきのばした方が金になる

2X： いや、それはわからない。最近ほら、医者も苦しくてー

このように、即、否定する場合もあるが、「んー、いやー」と、躊躇のあとに示されたり、「いやー、でも」と、他のマーカーと共起する場合もある。

違う、ではなく

[例4] (脳死になると、どのような状態になるか)

1Y: 脳は、もう、完全になくなる

2B: ではなくて、心臓自体も一週間

1Yの「脳だけが死ぬ」という見解に対し、2Bは「脳だけではなく、心臓も死ぬ」と言っている。「というか」が、部分否定、修正であったのに対し、「違う」「ではなくて」は、先行話者の発話を全面的に否定することがある。

えええ?、ええ?、え?など

[例5] (脳死は脳が死んでいても心臓が動いているから生きている、家族だと臓器移植はできない、というトピックで)

1X: 死んでいると思ったら俺そこまでだと思う
(笑い)

2B: えええ?自分の親とかが脳死になりました、したらはどうぞどうぞ臓器移植してください、そんな感じ?

3X: そんな気がするけどなあ

Xの「死んでると思ったらそこまでだと思う」に対し、2Bは「えええ?」と驚きを示すことによって不同意を表明している。さらに「臓器移植してください、そんな感じ?」と確認を要求している。

「えええ?」と長い場合もあるが、「え?」と短い場合もある。これらは驚きや疑問、疑念を表しているが、不同意を表す疑問文とともに現れる場合もある。

否定的な評価

[例6] (心臓を特別視するのではなく、他の臓器と同様に考えればいい)

1X: 脳を腸みたいに考えればいい

2Y: 厳しいなあ

3X: いや、そう思うよ

2Yで示した否定的評価は、3Xが、「いや」と答えているように、不同意として受け止められている。

「厳しいなあ」「かわいいなあ」「きつつ(きつい)」「その言い方ちょっと」のように、否定的な評価で示される場合が15例(9.2%)あった。しかし、の中には、冗談と受け止められ、必ずしも強い不同意を示していない場合もある。

[例7]

1A: 早く(笑い)殺せ

2B: そんなあ

3Y: なぜ生かしてた

全員 (笑い)

4X: それかわいい(笑い)

このグループは、終始笑いが生じていたが、1Aの発話は、笑いを伴ってなされている。また、それを引き継いだ形での3Yの発話も全員の笑いを生じさせていることから、冗談だと考えられる。その延長で、4Xも笑いを伴っており、否定的評価も、冗談の一種と受け止められていると考えられる。

躊躇

母音のひきのぼし、「うーん」などの言いよどみ、ポーズの後の発話などがある。Mori (1997) は「発話のタイミングの重要性」を指摘している。つまりターンの取得において同意が比較的スムーズになされるのに対し、おくれがちな発話は、躊躇や部分的な不同意を示すとしている。今回の資料ではポーズだけでなく、「うんとー」「うーん」等の言いよどみや、話すスピードが遅くなり、助詞の母音をひきのぼすとといった方法で躊躇が認められる例があった。

[例8] (脳死を人の死と法律で決めることについて、Xが臓器移植の問題もあるので賛成を表明。その後、AがXの指名を受けて)

1A: うんとー、移植のためにーそのなんかルールを決めなきゃいけないのはー [仕方ないことだとー] 思う、けれどもー [もー (強調)、

2X: [うん [うん

3A: もしも自分が脳死でーそのー法律で死って、決め決められると思うと、ちょっと、抵抗もあるかなって気がしました

意見が異なる場合、自分の意見をあえて表明せず黙っている、というのも通常

の会話ではとられるストラテジーだが、ここではAはXにより指名されたため、何らかの意見を表明しないわけにはいかない。そこで即答せずに「うんとー」と言ったり、助詞の母音をひきのばすことにより、躊躇を示している。さらにここでは「移植のためにルールを決めなきゃいけないのは仕方がない」と、Xの意見の正当性を認めているが、「けれども」以降で、異なる意見だということを明示している。

また、このような躊躇を伴った不同意は、相手の知識に関する発話よりもむしろ、意見に関することに言及する場合に見られる傾向が本資料ではあった。知識に関する発話で、比較的ストレートに不同意が表明されたのは、今回の討論のテーマについての知識が全員あまりなかったため、faceをおぼやかすことにはならなかったからだと考えられる。

○ターンの中で生じるマーカー

ターンの始まりでは、それが不同意を示すかどうかは、わからないが、ターンの中で、不同意であることを示すマーカーとなっているものがある。例7のように、一旦、先行話者に同意を示し、その後、不同意を示す場合や、先行話者の発話の一部を繰り返した後、否定する場合、疑問文で問いかけることによって、同意はしていないことを示す場合がある。

受け入れ+不同意

一旦、先行話者の発話を受け入れた後、不同意を表明したり、条件をつけ、部分的に同意を示した後、不同意を表明する場合があった。これは、「だけど」「でも」「ただ」のような、接続詞を伴っている。また、ターンの始めに「確かに」や「別に」のような語を伴っている場合もある。

[例9] (自分が脳死になった場合、死としてもいいかどうか)

1Y: 自分だったらいいか

2B: うん、自分だったら(笑い)いいと思います。ただ、肉親の立場として、まだ体温もあると、そういうふうに死人として扱われるのは、やっぱりちょっと納得できないっていうか、(略)

2B は、「自分だったらいい」と、1Y に同意している。しかし、「肉親の場合」は違うと一部不同意を表明している。「ただ」で、条件づけを行なっている。

繰り返し+否定

[例 10] (脳死して臓器移植する際に痛いかもしれないという話題で)

1A: ええでも麻酔するでしょう

2X: やあ麻酔しないでしょう?

A の発話に対し X は、A の発話の一部 (麻酔) を繰り返しそれを否定する (麻酔しない) ことによって不同意を示している。このように相手の発話の一部を否定することによって不同意を表明する場合がある。今回の資料では、4 例 (内 1 例共起) だった。また、「いや」「や」「違う」「ではなくて」などの否定的な表現で不同意を表明する場合もある。

疑問表現

相手の発話に不同意を表明する方法として疑問をなげかける方法もある。

[例 11] (未だに死とかよくわからないという Y に対し、X は死は突然にやってくるといったことを話している)

1X: いや、死にたくない時間ってあるじゃないですか、お風呂に入っている時とか、今死んだらやだなー [とか

2A: [そりゃ、やだよね

3Y: そんなこと、思う?

4X: うん

1X が「死にたくない時間ってあるじゃないですか」と同意を求めているのに対し、2A は同意を表明しているが、3Y は「そんなこと、思う?」と疑問を呈し、同意しないことによって X への不同意を表明していると考えられる。

また、先行話者の発話を、上昇イントネーションを伴って繰り返すことによって疑問表現として、説明を求めることによって、不同意を示す場合もあった。

表1

項目	個数	%	項目	個数	%
<ターンの始め>			<ターンの途中>		
でも	55 *4	33.7	受入+けど	12 *3	7.3
というか・より	8	4.9	繰り返し+否定	4 *1	2.5
だって	1	0.6	疑問表現	9 *2	5.5
いや・や	19 *4	11.6	<マーカ-無し>		
違う・ではなく	8 *3	4.9	発話内容	20	12.3
驚き(えええー・え)	8 *5	4.9	合計	163 *24	100
否定的評価	15	9.2			
言いよどみ	3 *2	1.8			

○特にマーカ-がないもの

これらの他に、特にマーカ-のようなものはないが、先行話者の発話とは逆の視点の発話となっているなど、発話内容から相手の発話に同意しているのではないことがわかるものもあった。また、ターンが比較的短かったり、長い場合は、不同意の「根拠」を伴っていた。

さらに、「違うって」「本人はどうでもいいって」のように、「って」を使うことによって、話者の発話を強く主張している場合もあった。

今回分析対象となった151例を上記を元に分類した結果は、表1のとおりである。(複数のマーカ-が使われているものは複数個を計上したため、合計は151とはならない。なお*は重複している個数を示す)

表のように「でも」を伴ったものが全体の33.7%と1/3を占めている。また、ターンの始めにマーカ-が表れるものは、117発話(71.8%)で、7割以上が最初の表現で不同意であることがわかる。

重複(共起)について見ると、「ええ?」は疑問や否定表現及び否定的評価と、否定表現の「いや、や」は他の否定表現(一ない、繰り返し+否定)と共起していた。

また、本資料では、否定表現や否定的評価といった直接的な否定が30%近くを占めていた。このような直接的な否定は相手のFaceをおびやかしかねない危険な

表現であるため通常はさけられるのではないかと考えられるが、今回このように高頻度で出現したのは、大学生同士の討論場面であることが関わっていると考えられる。また、前後に笑いを伴った否定的評価は、冗談とする共通認識があるのではないだろうか。討論場面でしかも比較的社会的上下関係、利害関係がない場面ではこのような直接的な表現をとることも許容されると考えられる。

しかしながら、では不同意表明をする際に配慮がないかというところではない。「いや」「違う」と、断定的な否定を多用していたグループでは、討論を続けようという求心力を失い、結論を出すに至っていない。藤井他（1998）は、人間関係を守り、討論を和やかに行なうために、場をなごませるような発話や、ジョーク、笑いなどが使われると指摘している。不同意表明においても、人間関係に配慮し、先に見たように、音のひきのぼしや「うーんと」などで躊躇を示したり、「なんか」というあいまいな表現を伴ったり、言いさし表現や断定を避ける表現を多用している。また、「確かに」「うん」といった一旦相手を受け入れてから、「けど」と不同意を示すといったことがされていた。さらに、相手の反応を見ながら、不同意表明を緩和させる場合もあった。

4. まとめ及び今後の課題

日本人大学生のグループ討論では、不同意を表明する際に、ターンの始めにマーカとなるものが生じる場合が7割を超えていた。「でも」「というか」「だって」「いや・や」「違う・ではなく」のような言語形式や、否定的評価、「えええー」「え？」のような驚き、「んー」のような言いよどみを、ターンの始めに示すことが、マーカとなっていた。ターンの途中にマーカとして生じるのは、「受け入れ+けど+不同意」、「繰り返し+否定」「疑問表現」であった。また、特にマーカが無いものもあった。

Pomerantz（1984）で指摘された発話を遅らせる、疑問表現で説明を要求する、uh'sなどで躊躇を示す、同意を示した後で不同意を表明する、といったことが本資料でも行なわれていた。これら以外に、今回は、マーカとなる言語形式も明らかになった。

また、不同意を表明する際には、人間関係に配慮していることが考えられたが、

本稿では、あまり触れられなかったので、今後の課題とする。

註

- 1) グループ内の人間関係は、ほとんどのグループが、同性は友人、異性は顔は知っている程度であった。討論の内容は次のとおりで、実施時期は1997年5月。
 - A. 意見を述べあうタイプ：日本人は外国語の習得が苦手だという意見があります。この意見に賛成ですか、反対ですか
 - B. 結論を出すタイプ：脳死を人の死と法律で決めることについて賛成ですか、反対ですか。グループとしての結論を出してください。

参考文献

- 藤井桂子、大塚淳子、杉山ますよ、森下雅子 (1998) 「討論におけるトピック移行の分析——日本人と学習者の比較から」『各国留学生と日本人学生による共同研究——日中韓豪の討論場面における会話分析』お茶の水女子大学岡崎研究室
- Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press
- Goodwin, C. & Goodwin, M.H. (1992) "Assessments and the struction of context." Duranti, A. & Goodwin, C. (eds.), *Rethinking Context*.
- Mori, J. (1997) "Well I may be exaggering but...: Self-Qualifying Insertion in Negotiation of Opinions among Japanese Speakers" エスノメソドロギー国際会議予稿集
- Pomerants (1984) "Agreeing and disagreeing with assessments: some features of referred/ disprefferes turn sapes" M. Atkinson & J. Heritage. *Structures of Social Action*
- Watanabe, S. (1993) "Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions." Tannen, D., *Framing in Discoures*. N.Y.: Oxford University Press.
- Yamada, H. (1990) "Topic management and turn distribution in business meetings: American versus Japanese strategies." *Text 10*

〈キーワード〉 グループ討論, 不同意, マーカー

Disagreements in Group Discussions

The Case of Japanese College Students

Atsuko OTSUKA

I analyzed group discussions of Japanese College students and indicated how to product disagreements.

The results are as follows.

1. Discourse markers are shown at the top of turns.

Conjunctions: "demo" "toiuka, toiuyori" "datte"

Negative expressions: "iya, ya" "chigau, dewanakute"

Surprising: "eh?, e?"

Negative assessments

Hesitation

2. Discourse markers are shown at the middle of turns

Agreements + disagreements

Question or request for clarifications

Partial repeat + affirmative

3. No discourse markers